

授業の質向上へ研修

東日本建築教育研が大会開く

東日本建築教育研究会(小林晶代会長)は7月30、31の両日、山形大会を山形県鶴岡市の東京第一ホテル鶴岡で開いた。建築系の学科がある関東以北の工業高校の教員らが参加し、建設分野の研究発表などを実施。より質の高い授業を行えるよう、建設関連の法規や製図、構造、施工など専門分野の知識を深めた。初

日には総会も行われ、事業計画や予算などを決めた。会合は年に一度東日本の各県で開かれ、今回は65回目。東北での開催は12年の宮城大会以来3年ぶり。今回は会員132校から約170人が出席した。少子高齢化で工業高校の生徒数は年々減少しているものの、復興関連を

はじめ建設需要が旺盛なことから、建築・土木分野の優秀な人材を育成する重要性は増しているとの認識を全員で共有した。初日に開会式と総会を行った後、製図・計画・法規・構造・施工の五つの分科会に分かれ、担当者が研究成果を発表した。構造分科会の発表では、仙台工業高校で教べんを取る益野英昌氏が、東日本大震災の被害状況を踏まえて今年改定された建築物の荷重設計指針の内容を説明した。写真、益野氏は、参加者が紙で作った建物の模型と、ミニチュアの津波発生装置を使って、水流(津波)が建物に与える影響を視覚的に解説した。



は、仙台工業高校で教べんを取る益野英昌氏が、東日本大震災の被害状況を踏まえて今年改定された建築物の荷重設計指針の内容を説明した。写真、益野氏は、参加者が紙で作った建物の模型と、ミニチュアの津波発生装置を使って、水流(津波)が建物に与える影響を視覚的に解説した。